会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和4年度職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進事業  （２）教職員の資質能力向上の推進②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第4回学習評価ワーキンググループ |
| 開催日時 | 令和4年12月19日（月）　10時00分～12時00分 |
| 場所 | リファレンス駅東ビル貸会議室（オンライン併用） |
| 出席者 | 事業責任者等：高岡　信吾、岡村　慎一、上里　政光　　　計3名  委　　　　員：植上　一樹、近藤　賢宏、岩崎　千鶴、佐藤　昭宏（OL）、  小田　茜（OL）、丹田　桂太（OL）、水田　真理（OL）  計7名  請 負 業 者 ：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　計1名  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計11名 |
| 議題等 | １．スケジュールの確認と今日の位置づけ＜学習評価 WG について＞  ・場所は福岡 （オンライン併用）  ・6 回の実施：主な議題  6 月 2022 年度の計画  8 月（9 月） 2021 年度版研修の振り返りと修正に向けて・2022 年度版の調査について  10 月 3・4 時間目のプログラム案の検討①  12 月 3・4 時間目プログラムの検討②  1 月 2022 年度版研修の振り返りと修正に向けて  2 月 事業全体の評価とまとめ  ＜研修について＞  ・1・2 時間目プログラムの研修の実施（7 月―10 月）  ・3・4 時間目プログラムの研修の実施  12 月 9 日（金）13：30～17：30：沖縄（研修＋調査）・講師：小田、佐藤  12 月 23 日（金）10：00～14：00：京都（研修＋調査）・講師：小田、丹田  1 月 12 日（木）13：00～17：00：岡山（研修＋調査）・講師：植上、佐藤  ＜調査・評価について＞  ・研修と並行して、3・4 時間目の研修プログラム作成に向けた調査の実施（7 月以降） 計 6 回  ・研修と並行して、研修事業に関する評価についてもデータを収集する。  ＜前回の WG からの進捗＞  ・研究者ミーティングの実施、3・4 時間目プログラム案の検討と作成  ・オンラインでの先生方と研究者でのミーティング調査の実施（11 月 4 日）  ・岡山での調査（11 月 22 日）  ・沖縄での研修の実施（12 月 9 日）  ――――――以上―――  2．3・4時間目の研修プログラムについて  →研修プログラム資料（スライド）をもとに、各プログラムについて説明。  ○3時間目の研修プログラムについて（佐藤）  ３限目の所で実施したのは、１限目、２限目の所でそもそもその非認知能力っていうものの観点から強みを明確化していくことの重要性を語った上で、その学科コースの中で重要な非認知能力は何なのかっていうことを抽出・分類・構造化ということをしていただいたので、それをどのように評価できる形に落とし込んでいくのかっていうところをやってきました。なので、３限目の構成としては、非認知能力育成というものがどれぐらい専門学校教育と接点を持っているのかということを簡単に前半１５分のところでお話をした上で、後半の主に３限目はワークが中心になるが、自分たちの学校教育に引き付けて考えたときに、どういう育成の仕方があるのかをワーク形式で考えていただくということを実施した。３限目の到達目標として、非認知能力を育む専門学校教育の多様な場面を知るということ、非認知能力を育む上で認知能力との関係性、要するに非認知能力だけを切り出して考えるのではなくて、その前提として、どのような認知能力が必要になってくるのかというところの重要性というところもWGで今まで議論してきたところでもあるので、そこを到達目標の２つ目に据えている。最後３つ目のところは、最終的に先生方が授業で評価していく上での評価シートを自分たちで作ることができるようになるということが非常に重要だというところがあったので、そこを３つ目の到達目標に掲げている。今日この時間ですべて説明すると時間がかかってしまうので、今Slack上に小田さんの方から京都の研修でどういう内容をするのかっていうことの資料アップいただいているので、細かなところを手元で確認をいただければというふうに思う。前半のところのポイントっていうのは、専門学校教育ならではの特徴っていったところで、もともと入学時点で比較的非認知能力をつけて来ているっていう子もいるかもしれないが、そういった子たちばかりではないということを考えたときに、職業専門的な教育を通じて非認知能力を高めることを通じて、なかなか入学時点で人との対人関係など、そういったことを身についてないような子達っていうのが、結果的にその職業教育を通じて汎用的な社会人の基礎的な能力を高めていけるようなところ、そういった所とかの可能性についてなどは前半のところでお話をさせて頂いた。後は多様な場面というところで、正課内教育だけではなくて、正課外のところ、いろんな清掃活動であったりだとかボランティア活動、こういったものも使いながら非認知能力、特に観察力であったりだとか気づける力みたいなところをきちんと養っていくことができるんだというようなこと、これまでの先生方のヒアリングの中で出てきているところだが、必ずしも正課内教育に閉じない形で、非認知能力を育んでいる場面が、さまざま専門学校教育の中で生まれているんだっていうことなどをお伝えするということをしてきている。後半のところだが、その形成的評価のシートを作ってもらうところは、メインに据えているが、そもそも成績評価はどういった種類のものなのか、というようなことをお伝えした上で、具体的に自分たちの教育の中でどういった育み方をしていくのか、ということを考えていただくというところで、既にSlackの方で共有しているが、かなり事前ワークにしっかり取り組んでいただいた上で、３時間目のワークを走らせるという構成にしている。事前課題のところがかなりニッチな内容になっているが、そもそも自分たちの教育活動の中でどういった活動が目指したい非認知能力を育んでいく上で、コアの活動になるのか、ということなどを事前に考えてきていただくということをワークとして据えている。その事前学習をする上で、どういういった認知能力が、コアとなる活動をする上で前提となる知識やスキルにはどのようなものがあるのか、ということも事前ワークの中で先生方に考えてきていただいて、それを先生方同士ですり合わせをしていただくというようなことをワークの中で展開している。ある程度、学科・コースの中で共通のワークシートみたいなのをその後に作っていただくということをワークの中でしている。非認知能力を育んでいく上でコアとなる活動は何なのか、そこでどのような活動を展開していくのか、ということをある程度具体的に検討していただいた上で、その活動を評価していくために、どのような評価シートが必要なのか、というところをワークの後半のところで検討いただくという形で設定している。具体的には、評価の観点は何なのか、それぞれの観点について、どういう水準を設定すべきなのか、というところを当日は検討いただくということをワークの中では実施している。基本的なポイントとしては、２限目までで考えてきた学科・コースで大事にしたい非認知能力を具体的にどこでどのように評価すべきなのかということを先生方同士で目線をそろえていただくということ、それをすることを通じて、先生方同士の中でどのような評価観点や水準が必要なのかというところの共通言語を作っていただくということ。それができれば、専門学校に関わる様々なステークホルダーの方々、高校の先生方や企業の方々に対して、こういう力を育成しているということをぶれずに語っていくことができるので、そのためのコア活動や行事を明確化していくこと、評価シートを作っていくということを３限目の中心的な活動として設定して、研修を実施した。３限目については以上。  ○4時間目の研修プログラムについて（小田）  4時間目は学生個人の成長どう評価するかということで研修を行なった。到達目標としては、１～３限目は非認知能力をそれぞれ求められる業界との関係で非認知能力の何を抽出して言語化して分類してそれをいかに評価に落とし込んでいくのかというような内容だったが、4時間目は、業界で必ず求められるさまざまな非認知能力も全て獲得できるとは限らない現状であったりだとか、あるいはそれほどその学科としてこれを絶対必ず育成したいといったところ以外でも、学生が身につけている能力とかそういうものがあるんじゃないかというところ、でそれを評価することで学生の授業のモチベーションになったりだとか、本来求められるべき身につけるべき非認知能力の育成にもつながっていくっていうようなところで、やっぱり学科で重視する能力以外の能力にも目を向けて評価する、その手段として個人面談とか個人面談で評価シート、その個人面談用のシートを作るっていうような、そういったことに関するあのワークをしていただくというような内容で研修を行なった。4時間目の構成としては、学科で重視する以外の能力以外にも目を向けるのはなぜかということをお話させて頂いた上で、実際にこちらでちょっとAさんとBさんというような事例を用意して、例えばAさんだったらこういうような評価をすることができるとか、こういう声かけができるんじゃないかっていうようなシートを示した。その上でワーク2ではまた同じような状況のこういう状況の学生さんがいるという話を伝えた上で、じゃあ実際にどんなお声かけをしますか、ということであの先生方にワークをちょっと行っていただいたような内容になっている。最初の内容としてワークに入る前の内容として、同じ学科でも学生たちの特徴や個性はさまざまというようなことを、1時間目のスライドもちょっと出しながらお話しさせていただいて、個性や特徴を把握してないと学生たちの長所や変化の機会を捉え損ねてしまうというような話や、それをじゃあ逆に把握すれば、教員自身の評価の引き出しも増えるっていうようなことをお話した。あるいは学習者、学生自身の学習への動機付けにもなり得るというようなところでお話した。また成長の多面性の把握というところで教員が意図した面ばかりが成長するわけではないというようなところで、多面性を把握できていないと評価の観点が狭まって特徴・個性に応じた成長は捉えづらくなるというようなところで説明した上で、じゃあ把握すればどうなるのかということで、教員との関係性の充実とか、モチベーションアップにつながるということで、非認知能力の求められるもの以外にも目を向けることのメリットということをお話した。その上でワークとしては、まずは先生方にこういう話をさせていただいたうえで、普段どのように個性や特徴を把握していますかとか、どんな風にフィードバックしていますか、といったことを先生方の2グループに分かれて意見交換をしていただいた。それでその次に個人指導というものがSlackで上がっていると思うが、それをお配りしまして、学生自身に個人シートを自分で書いてもらって、これまでの学習状況とか生活状況とか自分が身につけていると思う能力とか強み弱みとかそういったものを書いてもらう、それによって学生ひとりひとりの気づきも得られるし、学生自身が記入してもらうから先生たちの負担も減るんじゃないかとか、教員同士での情報共有もしやすいというような形で、説明した。いろんな活用例とかちょっと長くなってきたのでもうちょっと簡単にお話ししようと思うが、個人面談をする事のメリットの話をした。その上でAさんとBさんの事例を話して、こういったAさんはこんな人だが、どんな風な声かけしますか、ということで、教員による読み返の例というものを話したりした。この声かけの事例もご紹介した。Bさんに関しても事例を紹介して、引っ込み思案で慎重な性格で行動が遅れがちということで、面談で話をしたが、それをBさんの強みを見つけて見るとどんな声かけてきますか、ということでワークをしていただいて、こんな声かけてきますよねというお話をして、お話を終えた。このような形で個人面談シートを使うメリットデメリットという話をして、それを活用した指導方法の充実とか学生のモチベーションが学生の動機付けになるっていうことをポイントとして最後話したというような内容になっている。4時間目の全体の説明は以上になる。  3．沖縄研修の振り返りと改善に向けて  植上  →資料：「学習評価WG第3回」をもとに、沖縄研修の振り返りと改善に向けての説明。  ――以下、資料の一部のみ記載―――  （1）沖縄研修後の主な意見について  ・高岡先生：内容的には良かった。ICT 研修の方では、4 時間目の学生ケース検討では、身近な学生  の事例を考えさせている。というのも例題だと、学科によって考えづらい可能性があるから。しかし、今回の 4 時間目は、分かりやすい例題で、個人的には明確な答えを持ってやる方がいいと思っている。  4 時間目に関して非認知能力は表裏一体。そういう示し方が大切。今回の事例：慎重と積極性。学生へのフィードバック活用。非認知能力の活用をもっと明確に示せるワークもありうるかもしれない。  ・岡村先生：3 限は、形成的評価を自覚的に捉えて動いてほしい、評価観点を先生はどう提案するんですか？というメタ認知できるような、声掛けをしたほうがよい。あなたの目指す到達目標は何？という問いかけがあるといいと思う。その構造が先生で分かるとはっきりする。やっているワークの位置  づけの全体像を捉える。形成的評価の意味づけ・重要性を伝える必要がある。  4 限は、小学校時代の通知表の先生のコメントをイメージしてもらったら分かりやすいんだろうなと思う。学生のやっている行動を構造化すると、こうだよね、それには強弱があるんだよね、といった補助的な声掛けがあったほうがいい、また、個人面談シートの作成経緯…ジョブカード、非認知能力の要素などあると思うので、その裏付けの解説もしたほうがいい。  →3 限・4 限とも先生のメタ認知を促せるような説明や補足解説が重要  ・近藤先生：3 限ワークに関してやらないといけない、全部埋めないといけない、といった焦りとかあるかもしれない。「途中で終わっても問題ない」ことをちゃんと伝えた方がいい。  →佐藤さん：作業を埋めるほうに研究者側が指示しがちだった。  →岡村先生：グループの差について、きちんと言語化して伝えるとファシリテート的によい。  近藤先生：よかった。先生方は、スライドで示されているような面談は日ごろやっている。それを非認知能力の観点から、考えたほうがいいということをもっとしっかり打ち出せるといいのではないか。事例のところも「非認知能力」の箇所だけ赤字にできるといいのではないか。  ・岡村先生：1～4 限は連続だとは思うが、3 限受講の前に、最低限知っておいてほしいことシートを予め用意しておいたほうがいいかも。形成的評価の解説とか。  →佐藤さん：1，2 時間目で 3 時間。3，4 時間目で 3 時間、合計 6 時間イメージ。  ・岡村先生：4 限目に関して当事者が、ここで学んだものをどう生かすか？を振り返ってシェアしてもらう時間があるといいのではないか。（岡村先生）  ・小田：3 限について、事前課題９の記入例を今回の事例踏まえて、作り変えるといいかもしれない（自己省察の例は、左から右へ読む順などが少し分かりづらい？）。また、事前課題８について、チーム検討する際、個人でまず書く→すりあわせるという流れを今回ワーク中に説明する形になったので、事前に手続きの流れを明確に指示できたほうがいいのではないか。事前課題８の記入例も、事前課題レジュメには掲載されていたものの、3 時間目の時に改めて解説をしたほうが、ワークに入りやすいかも。  （2）研究者ミーティングでの打ち合わせ（12 月 14 日）  ＜3 時間目について＞  １．なぜ、３時間目で形成的評価を扱うのかの説明の追加  ・形成的評価とはどのような特徴を持つものか。  評価の種類の中での形成的評価の位置づけ説明  ★学習評価研修の初年度に作成した総括的評価との違いなどのスライドの挿入  ・学習成果の評価として非認知能力を取り入れることの具体的なイメージ  ★非認知の観点を取り入れた評価の具体例としての小学校の成績評価の多様性≒専門学校  ２．研修展開について  ・IRC では、２つのグループに対して実施。  事前準備に差があり、グループワークでは個別対応をしつつ進行。  →レディネスの違いも含めて全体共有、ワークの解説までしてもらったほうが全体の学びになってよかったのでは？  ★完成度より、ワーク→教員間での考え方の共有を重視  ３．スライドの修正について  ★形成的評価の水準づくりのワークシートと事例（自己省察）のワークシートの形式統一  ＜4 時間目について＞  １．事例 A・B についての説明の強化  ワークにおいて、非認知能力の観点を用いる有効性（使い方の多様性）を明確に説明する  ２．個人面談シートの説明の強化  ＜その他＞  （今すぐ改訂ではないけれど）５時間目…  ★教員たちがどう生かすか、教員主体のラップアップ。実行にあたって、何がボトルネックになり  そうか、課題の洗い出しやネクストアクションの検討が合っても良いかも  ⇒京都に向けて改善を図る  ―――――――以上―――  ○研究者グループからの補足等  小田  →資料：「1223YIC京都研修投影資料3時間目」をもとに、沖縄研修の振り返りについて補足説明。  ・いただいた意見を踏まえて修正版を作成中で、直前にSlackに上げたので、そちらを使って説明をする。最初の方は特に変えてないところが多いが、まず岡村先生からいただいていた先生方のメタ認知的なところで形成的評価が重要だという話を最初に入れた方が、これからやっていくワークの意味などを理解していただきやすいのではないかというようなところで、そこはちょっと反映している。それは先ほどちょっと先に事前に出してしまったが、評価の種類っていうことをちょっとまず改めてご説明をして、先生方としても既に実際にされている先生もいらっしゃると思うが、授業が終わった時だけの成果評価ということではなくて、非認知能力の育成過程育成されていくものを評価して行くには、その授業途中での評価が重要だということで、形成的評価の話はちょっと入れ込んでいく予定にしている。あとは前回ワークのそれぞれの目的・意義というのが示せいた場所とそうじゃなかった場所があったので、この意図とかはお示しできていたが、ワークの目的を形成的評価するにあたってのスキル学ぶっていう形でもうちょっと言語化をさせていただいて、作成したというところもある。ワーク1とワーク2についての内容自体は変わってないが、ワーク2を作成いただいた時に、それこそ先生方にグループによって少し進捗も下がったこともあって、ちょっとつまずかれているところもあったので、手順のことをもう少し充実させたり、こういった内容で非認知能力はこんな内容を、あるいはこの場面・課題・目標・評価観点はこのようなことを書いてみてくださいというようなスライドを補足して入れている。また結構ワーク中にやっぱり完成させないといけないというような気持ちでかなり焦っておられる先生方もいらっしゃったんじゃないかってことで近藤先生からも完全に完成させようとするっていうところを伝えなくても、共有することに意義があるっていうところで声かけがあった方がいいんじゃないかっていうことで、ちょっと補足説明して、3つ選んでくださいって話でも、1つだけちゃんと今回はやってくださいって話とか、今日完璧に完成させなくてもいいですよということで、できればその完成させるようとするプロセスを通した気づきだったり、共有っていうものを大事にできるようなワークにしたいなと思っている。あとはワーク1・2がなんで意味があるのかっていうことについてもちょっと追加した。あとは評価観点というところで、佐藤さんに先ほどお示しいただいたものワークシート、こちらも実際ワークで作っていただいたが、ちょっと手順の方の説明が少し不足していたかなと思ったので、ワーク3の手順というものを、まずはこっちに関しては先生方事前ワークではやっていないので、まず個人でも少し書き出していただく作業、自分なりに考えていただいた上で、それをチームで共有して、共通版を作るっていうような手順をお示しした。あるいは評価シートのところも前回はちょっと違う別のところから引用してきたデータで、この評価シートの例を出していたが、こちらもこちらが用意している評価シートと対応する形で例を作って、これについてこんな感じで作成してみてくださいっていうような声かけする予定。またワーク3の意義についても前回入れていなかったので、ちょっとこれ入れることで授業での教員間でのハードルを実際に目線合わせするとか、実際に沖縄で研修した時もある方はある程度ワークシートとかいろいろ準備できておられたんですけど、やっぱここの水準の違いというところで結構気づきがあったみたいだったので、こういった意義っていうことも改めてお伝えしたいと思っている。あとは評価シートを作成される途中での声掛けとしてはこれ確認ポイントをちょっと声かけするっていうことで、これは以前もスライドで出していたが、改めてちょっと大きめに出した。内容はさっきと一緒になる。このような形でちょっと先生方から頂いて意見を踏まえて現在ちょっと作成中。ちょっとこれ未完成なので、まだ反映できてないところとか噛み砕けて無いところがあるので今後また進めていく予定。  佐藤  ・今、小田さんから説明いただいたように沖縄研修でいただいたフィードバックを踏まえて資料の修正ということは行っているので、それでうまくより検証の流れが良くなるのかどうかということを京都のほうで確認をさせていただいて、年明けの岡山に臨むということで流せればっていうふうには思っている。  丹田  ・4時間目については先ほど佐藤さんからもあったが、先生方からいただいたご意見をふまえながら現在修正を進めているところ。いただいた意見の中にもあったがメタに事例を出しすぎているところもあったかなというふうに思うので、もう少しメタ的に先生方の事例をご理解いただけるような形で提示しようという風に考えながら修正作業を進めているところ。  植上  ・小田さんらからいただいたように、沖縄での研修が終わった後、研究者グループでミーティングをして、どうしようかってをして、今3時間目の方向についてはそういった形で。4時間目についてはレジュメの3ページもさらっとだけ書いてあるが、特に事例のABについて説明をもう少し強化しようということ、あと岡村先生から頂いたことと関係するが、個人面談シートの説明をしっかりと強化しようという話を中心にしているところ。あと研究者ミーティングで出てきたのが4時間目終わった後に、じゃあこれを結局4時間目まで学んだことをどうするんだっていう話を先生方で交流する時間を作った方がいいんじゃないかっていう話、岡村先生からいただいた通りだが、このあたり今年の課題ではないが、5時間目とかあってもいいのかなって話とかをちょっと研究者ミーティングでもしていたが、この辺りは京都・岡山でいきなりやるというわけではないが、ちょっと課題として記しておきたいという形で記しているところ。沖縄でやった内容とそれの改善点に向けてということで、研究者グループで話してきたことで今お伝えした。  〇3・4時間目の研修についての意見交流  近藤  ・前回沖縄で実施したときの後の振り返りの場でお話したこととかが、さっそく修正版として作っていただいているので、それでまた京都でやってみて、時間的な部分とか、受けている方々がそれでどういうふうに前に進むのかというところが見られるとすごくいいなと思う。前回の研修の中でも少し話をしたグループワークとかグループで話し合っている時に、普段あまり使い慣れてない用語、専門用語が出てくるところもあったり、あとやっぱ情報量も多いので、ちょっと焦るって言葉で一応書いてはいるが、途中でちょっと今どこに向かって何をしようとしていたんだっけ、みたいなところに陥りやすいのかなとか、慣れてない分実際はもうちょっと時間をとってやりたかったっていうような印象もあるのかなと思っていて、なので今ご提案いただいている「5時間目」とするかどうかは別として、この研修を4章（4時間目）まで受けた後に、今後に向けてのそのチームでのアクションプランとか、そういうところを、時間をとって話される事が凄く今後に向けていいですよ、みたいなこうちょっとアドバイス的なものをもらった上で、研修が終われればいいのかなというふうに思う。（近藤）  →ありがとうございます。（植上）  高岡  ・岡山でしていただいた時よりもすごく良くなったなあというところから私は入って印象的に。事例に関しても私は個人的ある程度みんなが想像できるテーマを持って、皆さんでそれに対して検討していくという形の方がいいと思う。だからもちろん今抱えている先生方のその事例というのを集めてやるっていう方法もあると思うが、それだとすごい時間もかかるし、共有するまでにまたちょっと時間がかかるので、ある1つのテーマをこうやっていくっていうのはすごくいいことだなと思う。最後はもう先ほど近藤先生が言われたが、これをどう活用するのか、具体的には例えばガイダンスの進め方をどういうようにするのか、とか。前に研修のこの中であったような記憶があるが、そもそもいいとこがない学生いうことはでた事あると思うが、非認知能力というのは基本的に良しとされることだと思う。さっきも事例の中で言っていたが、積極性っていうものもすごくいいって言われるけれども、慎重に物事を考えながら逆に積極的に一生懸命バタバタ動いている人にはわからないところに目を向けるっていうのもすごくいい意味での非認知能力だと思う。でもこれはすごく対照的な位置にあって、でもその子はどこにもいないっていうか、結局、消極的でも積極的でもいいところが見つけられないとこれは活かせないと思う、現状として。そうすると以前話題にも出たように、もう何もいいところない子はどうするんですか、みたいな、これ確かKBCさんで、沖縄で出たような記憶があるが、それを見抜く力がないとそもそもこれを活かせないと思う。それはすごくあると思う。なので、じゃあそれどうしたらいいのかっていうアドバイスぐらいはあったほうがいいかなと。基本的にはもうやることは非常にシンプルで、要するに教師が授業をしている間にそれを見るっていうのはそんなに余裕がないので、学生にいかにワークをさせながら、一人一人のその行動や表情をどう見るのか、それが実習だったり、まさにこれは繋がっていると思うが、実習だったり現場でのっていうことになると思うので、そういうところで目立つ子だけを見るのではなく、むしろ目立たない子をそういう場面で見てあげるとか、そういうことでいいと思うが、そういうところをある程度アドバイスしてあげないと、最初からこの子のいいとこ全然ないし、っていうところからいくと救いようがない、この研修でやっていることが、どこにも生かしようがなくなってくるので、そこはちょっと気になる。どうすればいいのかっていうのはもうはっきり言って、僕が言ったようにやり方としてはそういうことしかないと思う、逆にやはり座学の授業ばっかりやっていたらわからない。だからそこで学生同士がコミュニケーションを図れるようにグループ学習取り入れるとか、アクティブラーニングをどう活かしながらやるとか、そういうことをとにかく学生が自ら動いていく場面をあえて作って、その中でしっかりと見ていくということしかないと思うが、私の授業ではどうのこうのとかっていうようなことではなくて、そこは一つ工夫しましょうかっていう。（高岡）  →学生の協働性を作っていくということと、あるいは教員の協働性みたいな形で複眼的に見ていくというところは大事かもしれない。（植上）  →それはあると思う。その先生の授業では見えないけど、他の先生の授業の中ではこういう行動があるよ、みたいなこともとても大事なポイントかなと思う。いずれにしても、非認知能力を生かそうとする場合、それがある子に対しては、この子に自信がなくても自信を持たせるきっかけにできるようなこともあると思うが、1番根本的なところを言うと、さっぱり良いところがない、というところからスタートしてしまうと、そこで止まってしまうので、そこをもう1つ何か、どう見ていくのか、物事をどう見ていくのかとか、あれば。（高岡）  →その辺は実践論みたいなところ。（植上）  →だから、新人の先生からすると、とりあえずこういうことやってごらんとしか言いようがないけど、ベテランの先生はいろいろな場面でそういったことを身につけてきていると思うので。（高岡）  →すごく面白い、実践編とか、実践論の研修を作っていくというとこで。（植上）  ・それともう1点が今ちょっと佐藤さんの説明聞きながら思うんですけど、やっぱりこの文科省事業って1番やっぱり気になるのは、我々の手から離れた後のプログラムはどう生かして行かれるのかっていうのが、作った側からすればそれぞれにやっぱり考えの中でこう進んで言っていますけど、初めてこれを見た人がどれだけ大事なポイントを見つけて、ちゃんと授業を行えるのかというところで行くと、この学習評価はすごく皆さんに気にしていただいて、こういう考え方を持ってちょっと今回取り組んでみましたとかっていうのを、さっきも佐藤さんから出たと思う。それをどうまとめるのかっていうところだと思うんですけど、その作った側はものすごくわかっているし、すごい深いところまで考えてもらっているっていうのがすごく分かるが、初めての人がどうそこのポイントとして見えるのかっていうのが、ちゃんとまとまっていなかったらわからないと思うので、そこだけ。全般的にそこはすごくしっかりと見ていただいて、あくまでこちらの検証に関しては人を変えながらもやったりしているので、人を変えても同じような効果が得られるというようなことの実証ができるので、そこはすごく素晴らしいなあと思います。（高岡）  →ありがとうございます。（植上）  岡村  ・もともとは学習評価っていうところを専門学校の先生方にっていうことで、まずは認知スキルについての評価ってどうなのっていうのを第1弾でやって、入門基礎編をやって、そもそもそうは言いながら専門学校ではそれだけではないものの育成をしているっていう、それだけではないというのは、例えばということで非認知能力っていう言葉を今回提示して学習をしてもらっているっていう。そうすると、やっぱり今回の1章から4章までっていうところが1つの流れとして何を私たちが先生方に提案をして、提示をして、何を学習成果として得て欲しいと思っているのかっていうところが、迷子にならないような工程表というか、流れみたいなのが1つあったらいいなという気がしている。先ほどもそういうシートをいただいていたが、やっぱりそう言いながら1章からずっとあるので、この連動性みたいなものを見ないと3時間目、4時間目とかで議論する前に1，2時間目があって、もっとその前に学習評価そのものがあってとういうような、そういうところを踏まえた上でのこの研修の位置付けていうのが常に我々も提案する時にわかるし、学んでいる側の方もそがわかるようにしたものっていうのが、ちょっと俯瞰図が欲しいなあっていうのは思う。その上で1つの提案として先ほど先生が言われた5コマ目というか、次のところとしては、専門学校って結局、知識・技能とか技術とかっていうことを即効的に身につけるっていうところが少し高いプライオリティとして社会に提案をして位置づけられて今まで行きました。でもやっぱ正解がない世の中で求められている人材の中には、実はこういう非認知能力っていうのが高く評価改めてされるっていうふうに言われるようになった、でもそれって実は専門学校って今まで「人間力」とかっていうなんかざっくりした言い方で言ってきたけど、それを私たちが育成しているということのビデンスが何も出して無いよね、と、なんとなくの個別の評価をいただいているけど、体系的に専門学校がそれを高めているんだというエビデンスを出していないから、実はこういうものも出せるようにして行きたい。それは学生たちの自信にもなるし、我々自身にも自信にもなるからねっていうのが私の思い。そこがなんか提案として出せるといいなあと思っているし、で戻ると5コマ目っていうのがもしいるとしたらば、それって各科目の知識技能とかを育成するために一生懸命授業を改善しながら苦労してやっていらっしゃる先生の中には、節々にそれを入れているものがあるよね、でもそれ先生気づいてないから、担任とか、もっと言うとコーディネーターみたいな人がいて、あなたそれこういうことを見つけようとさせるために授業に入れているよ、これ評価したらどうっていうのを言って、Aの科目とBの科目とCの科目でやっているものを繋いで、学生に提案できるというか、還元できるようなそういうコーディネーターを専門学校が育成できるといいなと、聞いていてすごく思った。これって小学校では担任の先生がやっていたけど、専門学校には担任の先生がいるので、もし担任業務っていうのが科目教授と分離するならば、そのスペシャリストにして行ったら俺いいのになあなんて聞いていて思った。これは感想も含めてだが、それが次かなと。（岡村）  →今、岡村先生、高岡先生からは、沖縄の研修もそうだが、1～4時間目通してのアイデア、ご意見をいただいたと思う。今いただいた意見を先走って引き取らせて頂くと、おそらく高岡先生と岡村先生ことは、今日は積極的には出していないが、このプログラムがこの事業が成果物としてもう1つ出す手引きの作成っていうところ。この手引き、実はまだあまり議論してないが、誰に向けたどういうものを作るのかっていうことを、研修の形が割とまとまってきたのでそろそろ1月2月はそっち側に向けてやっていくことが1つの方策かなと思う。誰に向けて、元々は先ほど高岡先生がおっしゃったように、誰がやってもできるような手引きをっていう話が1つアイデアとしてあったかなって思うが、そういった目的のものを目指すのか、それとももう少し岡村先生が言ったような流れとか俯瞰図を作るかというのはやや違うのかなと思っていて、書き手の側からすると流れとか俯瞰図をつくるほうが楽っていうことで、ちょっと固い言葉で書けるので。より落としていくというか、柔らかい表現というか、現場の先生に分かりやすく使っていく手引きっていうのは、結構作るのが難しいかなというふうに思いながら、どのレベル感のものを実際作れるのかどうかっていうのと作るのか、というところもまたアイデアいただきながら進めていければとおもう。（植上）  →もう本当に学習評価からの言葉で含めて振り返っていくと、結局専門学校がそういう言語化等も全然共通言語も持たずに、みんな一生懸命に人間教育っていうか、人を育てようと言うことを思って取り組んでいるのは確かなんだけど、でもそれが具体的に、逆に言えばそれこそ非認知能力というものの認知もされるような行動に移して行かないと、結局こちらが一生懸命やっていることってとても大事なことだと思ってやっているし、実際それを評価していただくっていうことも現場であるけど、それについてどういう取り組みをしているのかっていうふうに言われると、いや人間教育としてやっているんですっていうぐらいしかできない。それを、いやこういう非認知能力と言うところに目を向けて、それぞれの強みというものもしっかりと見極めた上で、共通で必要な非認知能力とその子の強みになる非認知能力を表面から指導してこういうふうにしているんですっていうふう言えれば、もっとやっぱりわかりやすくなるし、それが教員同士の共有できるようになると思うので、前提っていうのはすごく大事だなと思う。前提として非認知能力というのは今までやってきたことなんだけど、だけど敢えてそれを形として表現するならば、こういうことを我々は知らず知らずにやっていて、そういうことを高校生の説明しよう、あるいはその社会に説明しようというときに、もっと具体的な説明に繋がっていくっていうことになると思うので。（高岡）  →これはまだ研究者グループでもそこまで明確に話してないが、半年ぐらい前に話していたのは、ちょっと最終年度を迎えているが、こうしてやったこととか、特にこの学習評価ワーキンググループとかで話している材料自体も非常に大事な実は資料というか、この作成のプロセス自体非常に豊かな取り組みだと思うし、またできれば近藤先生とか岩崎先生とか田澤先生のある種のいろんな指摘というかお考えの変化もとかも含めて、まとめていただいたりするのも実はすごく大事なことかなと。つまりこの取り組み自体が何をやってきたのかということも、実はある程度まとめておきたいなみたいなことは野望というか、すごく大事なことなので、ただこのプログラムの中で成果物になるのかちょっとわかんないというか、ちょっと優先順位がとにかくプログラムをつけなきゃいけないので、ちょっとまだそこまで回ってないが、ちょっと余裕ができたら、特にもし来年度こうしたメンバー継続があるとするならば、そんなことも含めながらやれたらいいなというふうにちょっと思っている。いずれにしろ何らかの形で手引き的なものは作らなければならないので、ちょっと京都が終わったら、そろそろ考えて1月2月、でまたその時には先生方に意見を頂ければなと思う。その辺は研修がひと段落してからお願いできればと思っている。ちょっと中途半端な話だが、手引きをしっかりとまず頑張らないとかなっていう感じ。（植上）  上里  ・全体的に研修をフルで見ているっていう状況でもなかったので、今いろんな話を聞いていてある程度、目的に沿った形で1限目から4限目というのが流れとしてできているのかなっていうふうな認識をしている。今、問題として挙げられているように、手引きというところがどういう形で残して行くのかっていうところをこれから議論していくと思うが、もともとその手引きというのが、研修をやるための手引きなのか、あるいは研修をやった後理解できているようにして行くための手引きなのかというところで、先ほど誰向けの手引きなのか、と言っていたが、研修を担当する方向けなのか、受けた人に対して、あるいは受けるべき人たちに対しての内容なのかっていうところによっても相当手引きの内容は変わってくるだろうなと思う。元々、今年スタートした段階で植上先生から出てきた資料を今見ているが、そこは「手引きを見ることによって、非認知能力の評価っていうのはどういうふうにできますよという事が理解出来る」になっていたので、そういうと多分受講者側向けの手引きなのか。（上里）  →そう、教科書みたいな。（植上）  →だからそこをどういうターゲットとして手引きを作っていくのかというところが、やはり今後、今年度の最終的な実績っていうか成果物につながっていくと思うので、ある程度プログラムは出来上がってきているということと、先ほど高岡先生からもあったように誰がやるのかというところを含めての課題は残るとは思うが、その手引きを誰向けに作るのかというところは今後議論の中で確認していく必要があるかな、と思う。あと、今までの議論の中でもいろいろ出てきたように、4限目まで終わった後に、さっき言っていた先生同士で教育同士での協働性というところで、いかにそれを理解しているのかというところが出てきたと思う。岡村先生からも担任なのか誰になるのかがコーディネートしながらまとめていくということを、研修の中である程度、指示あるいは提案をしていくのか、もし今後5限目というふうになったときに、非認知能力っていうのがどういうものでわかりました、それをじゃあ、学科として何を一番のターゲットとして非認知能力学科の認知能力というのは何なのかというのを全員で作り上げるっていう研修をして、そこをじゃあこの学生に対してはどういうふうに見ていくのかというところまでを体系立てて作るのが研修だと思うので、これをさっき岡村先生もいったように研修終わったときに、実際現場に戻ったときに多分先生同士でそういうふうなグループワークをしながら、実際この研修で培ってきたこの非認知能力っていうのはこれなんだけど、この学科のＡ君という子がどうなのか、ということを討議する場ということを提案するのかどうか、というところをこのプログラムの組み込めるのかなと。研修プログラム終わって終了ではなくて、終わった後に現場に戻った後に実際に先生方でこういうふうなことをやりながら、非認知能力の成長度っていうのを確かめあう機会を設けてくださいね、っていうふうに作っていく、というところはさっきの協働性というところでは必要なのかな、と思う。単独の授業で、実習を持っている人は多分非認知能力の成長度ってわかると思うんだけど、高岡先生おっしゃったように知識だけを教えている人だと、なかなかそこは気づかない部分なので、でもＡ君っていう人はいろんな授業を見受けているので、Ａ君に対して関わった人たちが集まってきて、どうなのかっていう議論をしながら、そういう場を現場ではやっぱり求めていかないと、多分研修止まりで終わっていくのかなと思う。（上里）  →今の話は本当大事だなと思っていて、手引きについてはプログラム作ることに必死になっていたので、もうちょっと考えるが、実際に2月がこの事業の締め切りになると思うので、ちょっと相談する。（植上）  →今年の成果物としての計画としてはプログラムと手引きっていうのがあったと思うので。（上里）  →どのレベルの完成度かということと、要するに文章にするっていうことなので。単なるちょっと多分半年ぐらいかかる作業だなあっていうふうに普通はこういう事業とか作って、それを教科書レベルに落とすのって半年から1年ぐらいかかるので。討議についても、ただその学習評価ワーキンググループの延長としての討議というのは確かにその通りだなというふうに思うが、結局、上里先生がおっしゃったこととかっていうのは、別に学習評価とか非認知能力のことだけじゃなくて、要するに先生方がその専門学校の教育実践とかをどういうふうに自分たちでやっていくのか、交流しいくのかっていうそういうこと自体の場づくりの問題なのかなっていうふうに思っていて、それをこの延長としてやるのかっていうと、もしくはもうちょっと全専研とか、もしくは専門学校の全体の研修の中での位置づけの仕方をどう図っていくのかっていうところは、結構問われるなと。つまり、もちろんこの延長線上で作るのはありだが、おそらくそれとは別の土壌の中で作っていく、そういう体制とかそういう土壌がある中でこの研修を位置づけてもらうっていう方が本来的なんだろうなって言う気はしたという感想。（植上）  水田  ・流れが完全に終えていないっていうところもあってうまくコメントできるかなというところはあるが、ちょっと資料的なところはもう皆さん研究者グループの方にメールをしたが、皆さんおっしゃっている通り、その事例ってどんな意味があるのかみたいなこういう事例ですっていうところもの一旦リードがあったほうが良いのかなっていうところは資料として感じた。ちょっと別の話、さっきの話の議論からすると、今、日本工学院で働く人間としてコメントすると、さっきのいろんな見方があるとかというところで、かなりこの学習評価に参加することで、こういう見方があるんだという見方が結構広がった気がしている。特にうちだと卒業しても専門職に就きにくい学科とかっていうのがいくつかあると、そういった中でやはり教員は専門知識を集中的に教えるんだけれども、その裏でそうは言ってもこの子らの将来をなんとかしていかなきゃいけないみたいなところがあって、そういう教員がちょっと手引きとかの話になるが、それを読むことによって、こういう評価の仕方だとか、そういうのがあるとそういう専門職に就きにくい学科とかそういうところでも非常に役に立つのではないかなと言うところを思った。後半はちょっと感想になってしまうが、そういったところもあるんじゃないかなというふうに思った。（水田）  岩崎  ・岡山で現場のスタッフがやっていたものからすると本当にそこでも色々とお話させていただいたが、すごい改良してわかりやすくなっているなというふうに思った。その時に本人たちも1年目の教師でもあるので、やっぱりこうやる中で例えば、当たり前のことかもしれないけれども、認知能力っていうふうに書かれたれたそれって結局なんだったっけっていうふうにそこで戸惑ったりとか、そこは科目のことを書いたらいいよ、とか、なんか事前にその知識を教えて、そして実践的に非認知能力的な実践授業があるっていうふうに説明をしていくと、ああそういうことかっていうふうに言って自分の中に落ちていく、要はここ何を求められているのか、何を自分たちの頭の中で整理すればいいのかということを、しっかりとやっぱり指し示すことによって、理解をしながら、今やっている教育とかそこら辺の頭の整理もできるのかな、と思った。なので、あの子たち（＝岡山で参加した教員）ができるようになっているというふうに思った。（岩崎）  →本当に11月22日に岡山に私と佐藤さんでお邪魔して、実際いろいろとやっぱりご指摘いただいて、それを元にここでやっぱり改良しないとねと言って、色々と話せたのが本当によかったなと思っていて、そのような感想をいただけてすごくありがたい。では、岡山にはより改善したものを持って行きたいと思う。（植上）  佐藤  ・今直前でお話いただきたいには本当に岡山で色々ご意見をいただいたことが研修として形に落としてく上で非常に気づきであったりだとか、参考になる情報いただいたので、ありがとうございましたところまず私から申し上げたい。岡山に向けたところに対する修正ということをしていくが、なかなかやっぱすごい難しいところは、丁寧に説明しようとするとかなり情報自体が複雑になっていたりする部分もあるし、なんていうか、私はKBCやった時は、比べるとか、合わせるとか、なるべく簡単な動詞の言葉でやりながら理解を促進する働きをしてみたが、それがうまくいった部分と、うまくいかなかった部分とかの課題が出てきていると思うので、そこをうまく京都で吸収できて、また京都での課題を次の岡山で繋げられたらなってことを改めて先生方のお話を聞いていて思った。あとは手引きのところについては、結構年度内に言ったところは正直すでにこの研究開発自体も持ち出して外の時間でかなり長時間議論しながら進めているところがあるので、ちょっと時間的なところでどの程度のクオリティのものが出せるのかっていうところは率直な本音を言って、厳しい部分もあるのかなっていうことは感じている。手引きも学習者側に寄せていくのか、あるいはその研修を実施している側に寄せていくのかっていう2つがあるんじゃないかって話があったが、私はどっちかというと、その学習者向けっていうところはもちろん今のものに加えてどういう内容をそこでやってほしいのかっていうことをノートとかに加筆していくことはまだ必要かなと思うが、結局それどう使って現場にやっぱり浸透していくのかっていうところも非常に重要かなと思ったときに、5限目のお話が今日出ていたが、やっぱりそこって議事録の中では4限目を受けての5限目って話あったが、1限目から4限目を全部通してっていう話なのかなっていうふうに感じていて、結局どこがやっぱり現場で落としこんでいく上でボトルネックになるのかっていうことを、先生方にそれぞれ使っていただいくところが課題になってくるのか、みたいなことを挙げていただくみたいなことがすごく重要になってくるのかなと、次は思うので、そこをまた踏まえて研修の1限目から4限目をどういうふうに変えていくのかみたいな議論が出てくるだろうし、今日の議論の中では、なので、先生方としてこのあとこれを使ってどう落とされていくかみたいなところのケースとか事例を我々自身もそこから学びたいなって思った。  小田  ・手引きについては研究者グループでいろいろ話していくことがあると思うが、3限について京都で担当させていただくが、ちょっと佐藤さんからお話があったが、丁寧に説明をしていくと、かなり情報量多いので、なかなかちょっと混乱を逆にしてしまうのかなと思いつつも、ワークの手順の方やっぱ丁寧に伝えた方が良いのかなと思って、今回準備をしている。なので、ちょっと予定として、今は3時間目が90分で4時間目が60分、ただ沖縄ではプラスで 15分ちょっとかかったが、ちょっと3時間目は90分だと少し説明が足りないかなと思っていて、少しまたプラス時間が京都なんかちょっと増えてくるのかなっていう気はしているが、ちょっと沖縄ぐらいの情報量が良いのか、京都での情報量が良いのか、ちょっと今度の研修の先生方のご感想をアンケートでいただいて、岡山に向けてまた改善ができていけるといいかなと思っている。  高岡  ・これまた新たにその形成的評価を考慮してプログラムに含めてっていうことが最初出ていたと思う、小田さんの方から。それはすごく大切なことで、結局なんのためにこれやっているんだっけってことは常に頭にないといけないし、それに沿った方向で行っているのかっていうことがちゃんと無いと、結局学生からしても何に巻き込まれたんだろうみたいになると思うので。それは教師側がそういうものをちゃんと把握しながらやらないといけないという内容だったと思うが、小田さんあたりは結構教員がこう研修の中で作業している時に結構語りかけていた、話をしていたと思うが、そこで例えば、まさに今のその形成的評価的な要するに、これってこうこういう方法でいいんですかみたいな質問は出ていたことがあったか。要するに教員も何か迷っているのかなっていうのはちょっと思っていて。  →特に4限目のところ、その中で質問として挙がっていたのは、結構その担任の先生とそうじゃない先生によって、その学生の見え方が違うっていうなんかそういったとこは特に何か話ししていた。担任の先生からするとよく知っているので、ここが足りないとか、本当改善するべきと思っているが、ほかの先生から見るとあまり日頃接触がないということもあって、逆にいいところがよく見えて、ここいいんじゃないっていうふうな視点になっていて、そういったところで先生方同士がその人の学生の情報を共有することで意外と見えてくるものと、ちょっと見えてこないこともあるんだなということでなんかそういうフィードバックはあった。なので、そういった意味で今回の4限が沖縄の研修だと本当にベタにワークをして終わってしまったが、もしちょっとこれは4限をどうして行くかっていうのは、植上先生や丹田さんの考えがあると思うが、何か今後何らかの形で繋げていけるといいのかなっていうことをちょっと思った。（小田）  →なんか先生方とか、その研修を受けている側の先生たちも、結局これその辺のことを先生も言われたのって言われているのかなと思うが、そもそもなぜこの研修やるんだろうとか、ゴールはどこなんだろうとか、っていうことが迷っていれば、結局、終わったところでもう1つ何かをせずにこのまま終わると、みんなバラバラの価値観になってしまうっていうのはやっぱり確かにあるので、最後は本当に何かいるんだろうなというのが改めて感じた。（高岡）  飯塚  ・富山でちょっと聞いた話だが、今の話に結構類似しているのは、富山の人たちって学校側から学生の非認知能力をあげろという指示が出ている。だから「この研修を受けると教員は学生の非認知能力を育成できるんだ」っていうところで、そもそも研修に臨んだ。そうするとこれは知識を得ているだけで結局学生に対してどうアプローチしていくのかが分からないじゃないっていう話だった。今の高岡さんの話でいくと、要するに教員の向こうに居る学生をターゲットとした何かをするのか、それとも教員自体の非認知能力の評価というか、そういうものをあげるのかっていうのを、やっぱり事前の段階で伝えておかないとブレる感じがすごくする。それから現状で教員っていうのは、全然オプションがなく、要するに前提条件は何もなく、この課（科？）にいましたというだけで抜擢されるが、そもそもそういう教員っていうのは入ることを前提としたプログラムなのか、それともある程度非認知能力みたいなことっていうのはしっかりと身についた人間が集まって議論するのか、要するに変な話になるが、あなたは学生を評価するだけの能力を持っていますかっていう何かの前提がないと、やっぱりばらつきが大きくなる感じがした。とにかくこの研修は何のためにあります、何をどうするためにあります、って言うのが富山には結構伝わってないので、僕が富山に行ったときに、例えば飲み会とかで、「うんやっぱりあれってあそこで終わっちゃうんだ」みたいな話が結構多かった。だから本当に1～4までっていうのをやって、5時限目を足すっていうのはもう大賛成。そこにいくことによって教員の非認知能力の評価能力をあげる、その非認知能力の評価能力をあげたっていうことが、学生に対してどう影響するのか、みたいなところはやっぱり5次元で話してほしいという感じがする。  →今の富山のそのフィードバックを聞いて、そういうふうにみていたなと思った。もともとの文科省事業としては、学習評価っていうところの延長線上で評価というエビデンスをどれだけ我々が認識して、その学生たちの定点で、今目の前にいる学生をどのように評価していきますか、それができるようにならないと、それの成長のスタート地点が見えない、だから学習評価っていうのを見ましょうっていうのが認知能力にしても非認知能力にしてもその分類しながら、見ることができる観点というのを身につけていきましょう、というのがもともとで。そのもっと背景には、インストラクショナルデザインっていうのを開発したというのが研修事業として、前の段階としてある。今回もその形成的な評価というものをしていかないと、成長支援ができないよねっていうところなので、先ほどから言われている5コマ目というか、その次というのは、じゃあ評価をしたから、それをどういうふうに育てていくっていうところをするかっていうところに入っていく、要はソリューションフォーカスに入っていくっていうこと。問題把握をするっていうことをするっていうところと、課題解決をしますっていうのを一緒くたに考える傾向が先生多いが、自分の生徒とかでも、いろんな人の意見を聞いてこの人ってこういう人だよねというのが見えてくるのに、一元的な自分の主観だけで非認知能力を見るから、そこって偏っていませんか、って、だから問題把握と同じように私がやっているカンセリングの話で言うと、問題把握っていうのは区別してしっかりしましょう、それができるようになるっていうことが必要じゃないのっていうのが私はこの学習効果の位置づけだと思っている。でもそこだけで終わらないから、今、飯塚さんが言うように、それを育てるためにはどうするのかっていうところの解決策はまた指導法としてまた次のパートがあるよねって、この階層が見えないといけないだろうなと思った。今シラバスとかコマシラバスとか作って、そこに到達目標が書くけど、これを今度は実践するところのその中身はどういうふうに行動するかっていうのは先生方の次元として次のプログラムで学んでねって、いうそういう繋ぎになるだろうから。でそのヒントは実はICTの方にはある。ナカタさんがやっているその関わり方みたいなところとか、分析した結果でどういうふうに声かけるとか、どういうふうな見方するかっていうのはあるが、そこが全体図としてちょっと紐づけられてないっていうのは、うちの全専研としても今の研修プログラムの体系図としての問題かなという気はしている。実は、文科省の方に先週行った時に、舟木さんに話したら、研修全体の体系図を作りたいですっていうのを提案している、この研修は何の目的のどういう学習成果がある研修なんですよっていう、我々今カリキュラムマップを作ろうとしているのと同じで、先生方のそういう研修マップを作ってそれを全国に発信したいんだっていう大ぼら吹いているが、言っている。うちだけでやっていくのには限界があるから、飯塚さんがやっている情報協会であったりとか、TCE財団（？）とか、いろんなところから全部集めて、そういうマッピングをして、専門学校の先生方33,000人にどうだって見せたいということを言っている、余談だが、その中の一部を私がやっているという位置づけをやっている。（岡村）  →本当におっしゃる通りだなって思う。やっぱり先ほどの飯塚さんの話とも関係するが、やっぱりこのプログラムはあくまで評価っていうところが出発点なので、非認知能力を育成とか実践するためのプログラムではないっていうのは前提として共有しているんじゃないかなって。（植上）  →最初に出た時に浦山理事長に多分それちょっと言っていた、浦山多分理事長が育成というほう言われているっていうのは我々もわかっていたと思うし、だけどもうなんかそう思い込んでしまっているから浦村理事長が、で現場の方々はやれって言われるからみたいなことでやっているので、そこで相違は絶対あったと思う。だけどそもそもだから合わないだろうなって、目的に。でも初めての人からすれば絶対勉強になっているとこあると思うので。（高岡）  →先ほど本当に上里先生の話とも関係するのかなと思うが、全体のマッピングの中で、どういうふうに位置付けるのかっていうことが大事かなっていうふうに思うので、やっぱりあくまでこのプログラムでやれることはここまでの射程ですよ、という話はあるはずなので、ただそれはやっぱり文章か何かで明確に言わないとだめかなと。（植上）  →どこかしらで抑えておいた方がいいと思う。（岡村）  →手引きとかで位置付けるということもありかもしれない。あとは、やっぱり逆に岡村先生がマッピングを作っていただくっていうことに関しては、本当に大賛成なので、やっぱりそれがあると研修の位置付けがはっきりしいくし、やっぱり力の入れ方も、何でもかんでも全部やっていくと大変になっていくので、やっぱりキュッと絞りながら、でもちゃんとほかの研修との連携っていうのを図りながらやっていくと効果的になるかなというふうに思う。（植上）  →だから全専研というところのスタンスっていうか、毎年毎年、文科省事業でどこをやっているかっていうところを全体像の中での役割分担みたいなものをそれこそ、TCE財団だったり、情報協会であったりとか、それぞれがいろんな研修を専門学校の先生方に対してしているから、それはどういう目的のどういう狙いなんだっていう全体像を作ろうと。で福田会長それ意向としては、全専各連の会長が思ってらっしゃるので、それに乗っかって、ちゃんと全専研も認知されているようなので、じゃあそこで私たちは開発をしていくよ、こういうところを、っていうのを後押しも含めながらしていけるっていうことを、今後の総括にしていきたいなと。情報協会だって、今、国家資格のものを公開している、セキュリティのなんか。（岡村）  →ノウハウ共有セミナーっていうのがあって、教員の方々が忙しいので5時とか6時ぐらいから15分間だけ教員が自分の話をする、でそんな話について議論していくっていうことで、この間沖縄でも話したが、うちの学校っていうのは、みんながGoogle formsを使って云々している所を、こっちの方が断然簡単なんだよねっていうふうなとか、そういうものっていうのを15分間やって、うちはこういうやっているっていうことで共有するということをやっている。（飯塚）  →とりあえず研修については、今先生方から本当にたくさん頂いたので、京都・岡山に向けて、やっていきたいなというふうに思う。（植上）  4．今後スケジュールについて  〇研修について  【研修の日程】  ・12月23日：京都研修  講師→3時間目：小田／4時間目：丹田  参加→岩崎、上里、近藤、水田  ・1月12日 ：岡山研修  講師→3時間目：佐藤／４時間目：植上  　　参加→飯塚、岡村、近藤、水田（△）  〇WGについて  飯塚  ・学習評価のWGはあと2回を予定していて、今までの話を総括すると、クリティカルなマイルストーンが2つあって、1つ目は、研修プログラムができたタイミング、もう1つは、指導書をどのタイミングどうやるか、というところ。具体的に言うと、2月の中旬くらいのところでやるものというのは、全部が出来上がっていて、この3年間の総括のビデオも出来上がっていてみたいな状態にならないと決済ができない状態。なので、2月のWGをやったあとに、じゃあここから先は、高岡さんと岡村さんの決済で、という話にはでいないということを想定していただきたい。そうなったときに、岡山の1月12日、このタイミングで、要するに教材はとりあえずゴールが見えている状態になっているという状態と、指導書みたいなものは、どうするか。落とし方の問題だが、ざっくりいうとプログラム作るのが大変で、指導書は、骨子はできているけど、ものはできていないというところに落とすか。  →理想論は、教科書を作ることだったが、ちょっと無理なので、現実論でいうと、先ほど岡村先生が言ったような形で、この研修の位置づけ、目的、対象となぜ非認知能力というのが、こういうことをなぜやっているのか、と、なにがポイントなのかということに関しては、植上がバーっと書けば書けるのではないかな、と思う。（植上）  →そうすると、例えば、イメージとして、A4の3枚くらいの感じで。（飯塚）  →そう、A4で3～4枚くらいの読みもので、とにかくわかりやすく作る、というのだと作れるかなと。（植上）  →で、そこに俯瞰図みたいなものをついて、のっけのID（インストラクショナルデザイン）から入って、みたいな。（飯塚）  →IDまではなくて、学習評価のみというところが現実論かなと。（植上）  →そうすると、1月12日のときには、教材だけがほぼ完成状態になっていて、それから1月12日が終わった後のWGでは、最終的な校了原稿が出ているということと、植上さんのA4で3枚くらいの読み物が出来上がっているようなイメージ。そしたら、岡山の研修後に、変更の時間として1週間くらいとるか。（飯塚）  →プログラムについては、岡山でやって、最後に修正をした方が、みんなが納得しやすいので、1週間くらいとった方がいいと思う。20日が全体のプログラムか。（植上）  →20日が全体のプログラムだが、ここは進捗を話すような場なので、何か議論ということではないので、このプログラムは出来上がっていて、最終の調整に入っていて、この部分はこう落とすと決めている、という話でいい。（飯塚）  【WGの日程】  ・1月23日→10：00～　＜福岡＞  ⇒最終的な校了原稿、A4で3～4枚の読み物（植上）  ・2月14日→13：00～15：00　＜福岡＞  ⇒教材の出来上がりが皆さんの手に渡っていて、ビデオが出来上がっていればいいかなと思う。  ○ビデオについて  ・ビデオについては、また指示をいただけるか。（植上）  →ビデオについては、昨年と同じ仕様で作っていただければということで、今年やったこと、3年間でやったことが5～10分でまとまっていればいいかなと思う。（飯塚）  →型が決まっていなかったか。（植上）  →型は決まっていないが、側だけはある、全専研のページにあるものを。（飯塚）  →また23日のWGでもう一回教えていていただければ。（植上）  ５．その他補足  佐藤  ・指導書のレベルが、テキストベースのものをつくるということではなくて、もうちょっと情報の粒度をあげるというか、それぞれの1限から4限をどういう目的でやっているもので、どう先生たちに使ってほしいかみたいなことをより主眼において、A4の3枚くらいにまとめるという認識で会っているか。  →いつかは作りたい。（植上）  →だからイメージとしては、1限目はこういう状態になってほしくて、こういう内容を実施している、こういう構成にしている、2時間目はこうなってほしいから、こういう構成になっています、みたいな、先ほど言っていた骨子レベル、どう言うレベルで落とすのかという話があったが、その辺の認識は結構、年度末の納品、成果物の完了というところでは大事なのかなと思って。（佐藤）  →やるとすれば、1～4限がどういう目的とどういう目標で、そしてまた問題意識で成り立っているのか、というところを僕が書く。その上で、各時間のテーマと目標となぜこのような構成とワークを立てたのか、という狙いも書く。それを1～4と書いていって、本当は、できればもともともの狙いは近藤先生とか岩崎先生、田澤先生がやってみてどうでしたか、ということを入れたいというのはあった。ただ、型としてあまりバランスは良くないので、もうやってみてどうだったか、というのはなしにして、とにかく狙いと目的と目標と構成をガッと書いていく、というのがシンプルかなというのが、今の僕の把握。ただ、飯塚さん、アンケートと評価物は必要か。（植上）  →その辺は文科省に対して出す資料と、公開してもいい資料と、というのを分けるという感じ。単純に指導書という形にするのであれば、アンケートまで入れる必要はないかなと、それは実績報告書に入れていいのではないかなと。実績報告書は、文科省に対するものなので、僕の方で。なので、単純にこの研修プログラムを通して、教員に語りかけたいことをまとめていただければ。（飯塚）  →もし可能だったら、岩崎先生とか近藤先生、田澤先生に3年間の感想みたいなものを書いていただけたら、文科省に出すというところで、ありがたいと思っている。要するに、研修を受講した人のアンケートはもちろんとっているが、それとは別に協力校の指導者として、近藤先生、岩崎先生、田澤先生にはかかわってきていただいたので、そこでのご自身のこととか思いとか、ご自身の学校での教員の方々の変化みたいなものを先生方がどうつかまれていたのか、みたいなことがあると私たちにとってもありがたいということと、文科省にとってもこういう研修には意味があるんだ、ということが現場の先生方レベルでの叙述であるといいかなと思うので、ちょっとご負担になるかとは思うが、ちょっとありがたいな、と思うが可能か。A4で1～2枚でいいかな、と思う。（植上）  →今の点がすごく私重要かなと思っていて、骨子レベルでまとめを書くときに、今年は学習評価というものを非認知能力で見ていくことの重要性とか意義とか、それをしていくときの基本的な考え方だとか、1番最初の基本的なスキル、評価シートに落とし込んでいくというようなところを、結構射程になることを通じて、現状把握をしてもらうということが研修を通して、重要な点だったのかなという気がしている。その時に、結局、うちはこの観点ではそろっているけど、ここはずれてたねだとか、例えば3限目とかでも出ていたが、現状に対する気付きを得てもらうための内容が3～4限目含めて出しているのかなと思うと、基本的には成果保障の入り口に立つための基本的な知識のところと、現状把握を先生方でしてもらうというところは結構重要なポイントかなと思っていて、この4限の。それをしたときに、言っても研修の限界みたいなところもあるみたいなことを、委員の先生方にうまく書いてもらうというか、今後の残課題みたいなことを書いてもらうということが、レポートのあげ方としてあるのかな、と思っていて。そういうが研修の指導書というか、そういうところのサマリーでいいのか、みたいなところがつかめていなかったので。（佐藤）  →分けて提出するという形でいいのかな、と思っているが、それでどうか。もともと手引きという形で成果物を出すといっていたので、その手引きという形に関しては、植上の方で、もちろん佐藤さんにも相談しながら、作るというのが1本あって、それとは別で岩崎先生、近藤先生、田澤先生に研修を一緒に作っていく中で、研修を実際にやってみての気づきみたいなことを書いてもらう。要するにこれは、この事業に関する評価をしていただくということになると思う。（植上）  →なるほど。指導書とは別の形で先生方にそういった課題を書いてもらうということ。（佐藤）  →成果の評価物という形で書いてもらうということで、文科省の方に提出するという形でどうかと思う。（植上）  →私は大丈夫。他の先生方の同意が得られているのであれば。（佐藤）  →近藤先生と岩崎先生はうなずいていただいたので。田澤先生には、岡村先生の方からお伝えいただければと思う。それも1月23日までにお願いしたい。（植上） |
| 配布資料 |  |

以上